



## ゼミにおける体験的学びの機会の提供と学生の成長 — 学外プロジェクトの活用にかんする試行 —

国際学部 山田 修嗣

2001年4月から、国際学部に所属しています。専攻は社会学です。日欧比較を中心とした、産業・労働分野と環境分野の境界領域をメインに研究しています。大学院時代に、ドイツ人の先生とめぐりあい、ドイツと日本の地域社会形成の比較研究に取り組むようになりました。また、大学に勤務後は、自治体の市民参加プロジェクトへの参加機会を得て、これをゼミでの実習の題材にしつつ、学生と実社会を見聞しています。  
(やまだ しゅうじ)

学生の育成に学外のプロジェクトを活用し、体験的な学びを実現しようとする当ゼミの試行錯誤の過程を紹介します。実体験をとまなう現場には、学生達の多様な反応と反省があます。そして、彼らの頼もしく成長する機会があると感じます。学内外の人々と協力し、学生が何を感じとり、どのような力を蓄えているか、私見を披露しようと思います。

学生をどのような過程で、どのように育てるか。文教大学にお世話になって以来、この問いに正面から向き合っている先輩教員に囲まれ、私自身が育てていただいたように思います。人を育てることの重要さを感じ、時にその育成の現場を共有することを通じて、文教生との向き合い方を考える機会を多く得ていると実感しています。

国際学部で出会う文教生は、素直でまじめで、みなステキです。しかし、それゆえに、まっすぐ過ぎて失敗に弱いといったマイナス面が語られることもあります。とはいっても、興味の幅を広く持ち、とにかくチャレンジしてみようとする学生に囲まれ、楽しく講義や演習を担当しています。

現在担当している専門ゼミでは、さまざまな「語り」を「地域形成」にいかす研究に、学生とともに挑戦しています。湘南校舎がある茅ヶ崎市との協働といった観点で、同市のいくつかの企画に協力をさせていただいて

ます。このうち、最も長く取り組んでいる企画が、「市民討議会」とよばれる市民参加の仕組みです。市民討議会は、抽選で選ばれた市民に招待状を送り、そのメンバーがあらかじめ定められている課題について話し合い、市民提案を作ります。抽選による参加者の決定、市民参加者が話し合って方向性を出す方法に特徴があります。

同市はこの市民討議会を重要な市民参加手法の1つと位置づけており、毎年、テーマを変えて開催しています。市民に話してもらいたいテーマが同市各課から提示されると、まず、市民討議会にかけるべきテーマの話し合いがあります。学生の参加は、だいたい、このタイミングで始まります。そして、数回の実行委員会への出席（希望者のみ）、模擬討議会というリハーサルを経て、当日をむかえます。後日、事後評価を行う委員会への参加も経験します。つまり、学生は、市民討議会の準備段階から運営にかかわっています。開

催テーマの絞り込み、討議内容の検討、当日の運営や書記、事後の反省会と報告書作成といった具合に、一通りの企画・運営・評価に携わります。こうしたプロジェクトを通じた学びの機会を得て、アクション・リサーチの手法を学んでいるといえるでしょう。

討議会の当日は、学生も大忙しです。朝の準備として、会場セッティングがあります。グループ・ディスカッションを行うため、テーブルの配置、模造紙・付箋紙・筆記用具をセットします。そして、討議会が始まると、書記やグループ・ディスカッションの進行補佐を担当します。ここで耳にする参加者の発言は、地域がどのように構成されているか、人々が地域をどのように愛しているかといった貴重な情報となります。学生は、時に参加者の発言をサポートしながら、適切に討議が進行するよう気を配ります。市民が討議内容を発表する際には、模造紙を掲げたり、マイクを手渡し、発表者にメモを見せたりと、大車輪の活躍をしてくれます。頼もしいかぎりです。



さて、これらの学外活動が構成する意味をどう考えるべきでしょうか。学生の目線では、おもしろく貴重な経験であること、とても勉強になり座学では味わえない知見が得られること、市民を前に緊張するがこれも重要な体験となることなどが語られます。また、さまざまな世代、さまざまな社会的背景の人々が一堂に会する場に参加して、多様な接点を得ることが、自身の視野を広げるといった感想も耳にします。これだけでも、学生達は参加して良かったと感じ、成功を体験していることがわかります。

他方、教員目線で振り返ると、学生は、経験にもとづく「知」を得ているのではないかと思います。つまり、プロジェクトの場を借

りて、ゼミでの学びを実社会へ応用する過程を体験していると言えそうです。とりわけ、プロジェクトを主催する責任を感じつつ、1つの企画を煮詰め運営する達成感が、よろこびとともに成長を促していると感じられます。

たとえば、実行委員会での発言はとても勇気がいらします。けれども、その発言内容が採用され、討議会において実現されると、個人のアイデアを他者との協力によって形にする手法を体験できます。また、討議会の会場で、参加者から、適切な書記をしている、上手に進行していると褒められることがあります。この時、計画段階のさまざまな苦勞も報われ、記録に残す方法とその重要性を学ぶこととなります。あるいは、アイスブレイクの司会に立候補し、自身が大いに緊張しながら参加者の緊張をほぐすという複雑な立場になることもあります。この場合、一所懸命に参加者とのコミュニケーションをはかりながら、話しやすい雰囲気作りを学ぶことができます。

この通り、学外者の協力を得て遂行されるプロジェクト体験は、学生の学びにおいて、深く考える力、企画を実現まで貫き通す力、適切に情報を選択して他者とコミュニケーションする力を与えてくれます。この過程には、成功も失敗もあります。それらを糧とし、学生は、社会的な作業の現場を創出する手段、他者との協力を実践するノウハウ、社会で活躍する総合的な能力を学んでいます。こうした体験を経て成長した学生達は、実に立派に見えます。次に何をしたらいいか判断できる、必要となるものを準備できる、後輩や始めて参加する仲間をサポートし育てることができるようになるからです。もちろん、このような頼もしさは、プロジェクトを通じて、文教大学の信頼形成にもつながっていると信じます。

